

新しいことに挑戦し、変化をつけることで「息をする」作品を創りあげたい

「花と女性」をモチーフにした絵画制作だけでなく、絵本の挿絵なども手がける永田治子さん。現在は東京を中心に活動していますが、今年4月から島田市博物館分館で企画展「息する場所で」を開催し、故郷でも活躍しています。

【絵の道に導かれた基】

「実家は、同級生の家から離れていたのですが、一人で遊ぶことが多かったんです。だから、家にあつた美術全集などをよく見ることがあり、有名な作品と作家を覚えてしまったほどです。祖母と両親は、絵本を小学校低学年まで毎月買い続けてくれました。絵に親しみを持ち始めたのは、その頃からでした」

と、永田さんは本に囲まれた幼少期を振り返ります。

徐々に絵への関心を高めていき、あることを

きっかけに絵を描く楽しさを知ったそうです。

「小学校の写生大会で、校庭にあるイチヨウの絵を描いたんですよ。その時、先生に褒めてもらったことがうれしくて。それから進んで絵



作品を息づかせる画家 永田治子さん（井口）

を描くようになりました。その頃に培ったものが基にあると、よく感じます」

【芸術の魅力を伝えたい】

「女子美術短期大学に入学した日、恩師である故桑原

ひつもと 巨守教授は『冬の旅（シューベルト作曲）をたくさん聴いてもらいます』と言われまし

た。美術を学びに来ていても、音楽や演劇や文学など他の芸術に触れることが、造形の心を養うというメッセージだっ

たんです」

企画展の関連イベントで、市民とのワークショップなども行う永田さん。高校生へのデッサン教室では、驚きの体験があつたそうです。

「今の高校では、美術の時

間がない学校もあると聞き、衝撃を受けました。小学校の頃の体験、さまざまな芸術に触れた中学から短大時代があつたからこそ、私は創作を続けられています。若い頃の芸術や文化に触れた機会が、私の未来の可能性を広げてくれたと思うので、もったいなく感じます」

【挑戦が創造へつながる】

短期大学で学んだ後に渡仏するなど、画家としての経験を積んだ永田さん。しかし、今でも挑戦する気持ちをもち続けていて、今回の企画展も新たな挑戦だったと語ります。

「試してみないと何も生まれない、変化をつけるからこそ見る人に生命力を感じさせる『呼吸をする』作品が創れるんです。歴史のある日本家屋と自分の作品が『息をする』よう、ほとんどが今回のために描いた新作です」

目を輝かせ、新しい取り組みにも積極的な永田さん。生命力に溢れた絵は、さまざまな人に芸術の素晴らしさを伝えます。



子どもたちに絵本の作り方を教える永田さん

Shimadajin File #71

島田 Story 人